

国際部の初級日本語教育

——現状と将来への展望——

岡野喜美子

はじめに

本稿は、早稲田大学国際部の初級日本語教育について私見を述べるものである。

「国際部の日本語教育」とは、ひとことで言えば「アメリカ人学部学生の、1年間の日本留学期間中における日本語教育」である。国際部の日本語教育についてその問題点を考えていくと、当然のことであるが、1) 国際部独自の問題、2) アメリカ人学生の問題、3) すべての日本語教育に共通の問題、4) 総合大学教育における語学教育が抱える問題、の4種類あることが分かる。本稿では、1), 2) を中心に現状分析を行い、「国際部の日本語教育はどうあるべきか」という観点から具体的な提案をしていきたい。

これまでに「国際部の日本語教育」を紹介し、論じたものとしては次のようなものがある。

北條淳子「早稲田大学の初級カリキュラムとその教授法—国際部」¹⁾

上山民栄「アメリカに於ける日本語教育—教授法と評価の諸問題」¹⁾

川本 喬「学内における日本語教育の問題点」¹⁾

上記のうち、日本語研究教育センター(当時語学教育研究所)の北條淳子教授が書かれたものには、国際部の概要、学生の特色、日本語のカリキュラム、教授法、使用教科書、教材などがくわしく紹介されている。また、上

1) 掲載誌名は後出の[参考資料]参照

山民栄国際部参与(当時)のものには、アメリカ人学生気質、アメリカの大学での日本語教育の特色が紹介・分析され、同時にアメリカ人学生にとって望ましい日本語教育(すなわち、国際部に望む日本語教育)がワシントン大学での長年の経験に基づいてアメリカ側から提案されている。川本喬教授のものには、国際部に専用教室、LL 設備、LL 教室がないことなどの施設・設備面の後れと、レベル分け、教科書などの問題が指摘されている。国際部の日本語教育は、上記3氏によってほぼ正確にとらえられていると思う。筆者は、実際に国際部で教えてきた教師の一人として、そこに書かれたことの多くに共感を覚えるものであり、本稿もそれらに大きく負っている。紙数が限られているため引用できないのが残念であるが、最近3,4年の国際部の日本語教育でそれ以前と異なる点(*印を付した)を中心に以下ざっと紹介し、ついで、本題に入りたいと思う。

1. 国際部の概要

アメリカの提携校からの学部学生を中心に100名前後、1年間だけ受け入れる

9月新学期、3学期制(秋学期12週、冬学期6週、春学期12週)、国際部での単位はアメリカの大学の単位として認定される。講義(日本語の授業以外)は英語で行われる。ホームステイ制度

2. 日本語教育について

来日時、学習歴ゼロの学生10%前後*(1982年当時20~30%)、週7.5時間(毎日90分授業1コマ)、J1からJ6まで6レベル

3. 現在使用中の日本語教科書(副教材は除く)

J1・J2 クラス

「外国学生用基礎日本語」(早稲田大学日本語研究教育センター編 全53課)*

J3 クラス

「外国学生用日本語教科書初級」(同上、全40課)

J4・J5 クラス

「外国学生用日本語教科書初級」(同上)・「日本語読本中級」(同上, 全 28 課)

J6 クラス

「日本語読本中級」(同上)

I. 現在の状況—J3 の場合

最近3年間、筆者は J3 クラスを教えているが、まず、ここを中心に現状を報告し、国際部初級をめぐる問題点を考えてみたい。

1. 進 度

この J3 のクラスでは上にあげたように「外国学生用日本語教科書初級」を使用している。J4 では 20 課から、J5 では 25 課から始めるが、J3 では 11 課から始めることになっている。11 課から始める J3 の年間の進度はだいたい次のようになる。

秋学期 11 課～24 課

冬学期 25 課～30 課

春学期 31 課～40 課、その後別教材(今年度は「現代日本語コース中級 I」の抜粋と読み物教材を予定)

秋学期が終わった段階で下のレベルの J1・J2 と比べると、表現意図別文型の種類と数で J3 は J1・J2 にはるかに後れている²⁾。上のレベルであるのになぜこうなるかと言えば、使用教科書が異なるからである。J1・J2 では、語彙、文字、読む技能などより文型を早く学習させることを目的とした「基礎日本語」を使用している。一方、J3 の「日本語教科書初級」では、語彙、漢字が(少なくとも、アメリカ人学生には)非常に多いために 1 課にかかる時間が長く、進度が遅くならざるをえない、ということである。かといって、進度を速めるためにはしよって教えるというやり方もアメリカ人学生には不向きで採用しがたい。

2) 同期間中に J1 は「基礎日本語」の 28 課終了、J2 は同書 33 課終了

1年間のホームステイという留学期間と生活環境を考えれば、滞在中の早い時期に豊かな会話表現力をつけることは国際部のどのレベルの学生にとっても必要不可欠なことは明白である。国際部の場合、会話力の低さは英語への依存を助長し、より高い学習とコミュニケーションへの意欲と動機を失わせがちである。授業時間数の多少にも関係あることであるが、秋学期の初級日本語教育では一日も早く確かな表現力がつくよう、進度と到達目標を設定する必要がある。例えば、秋学期は漢字学習の負担を減らし気味にする、そうして、思い切り集中的に口頭表現力をつけ、それをバネに冬学期から漢字学習、読み書きに本腰を入れるという方法も試みられていいのではないかと思われる。

2. 学 力

J3は上に述べたように、「外国学生用日本語教科書初級」を使用しているが、この教科書を使うクラスとしては最も下のレベルである。今年、プレースメントテストによってJ3に振り分けられた学生のうち、アメリカでの学習歴が1年のものが半分、2年が4分の1弱、残りは1年半、8か月などである。J3の場合、「日本語教科書初級」全40課の11課から始めていることになっているが、1年も、あるいは1年以上2年も学習歴のある学生がなぜ11課からしか始められないのかという疑問は当然起こるのである。もちろん、学生によっては日本語を履修したのが1、2年以上も前で語学力が落ちている場合もあり、また、同程度の学習歴で上のレベルのJ4、J5に振り分けられる学生もいるので、個人的な事情とか能力の問題と全体の問題を安易に混同すべきではない。さらに、多くの大学の学生が「日本の大学の第2外国語」程度のペースと意識で日本語を履修してくることも海外での日本語教育としては当然と言えよう。

では、何が問題になるかということ、まず「日本語教科書初級」の学習漢字の数と学生の漢字学習力の間にギャップがあることである。10課までの学習漢字数は78字で、秋学期は24課までが範囲であるから240字ほど覚えることになる。この数は本来の361字を国際部用に減らしたものであ

るが、それでも J3 の学生にとってはかなりの負担になる³⁾。

アメリカの大学によっては、文字教育、漢字教育がなおざりにされ、極端な場合ほとんどローマ字だけで学習してくることもある。これは一部ではあるがアメリカにおける日本語教育の問題点である。それほどではなくとも、ひらがなの拾い読みがやっと、カタカナは自分の名前が書ける程度の文字力の学生にとって、たとえ 11 課からであってもテキストとしてけっしてやさしすぎることはないのである。

次に、全般に文法的な基礎が弱いことが挙げられる。留学生が母国で基礎的な力をつけ、そのうえで来日、日本ではそれを土台にして運用力、応用力をつけるというのが効率・効果のうえから理想であると思う。しかし、母国で日本語教育を受けたから基礎学力があるとは言えないのが現実である。10 年前、20 年前の学生に比べ、おそらくはビデオ教材の普及などで、ちょっとした応答ができる学生が来日するようになってきている。しかし、その学生たちに文(文章ではない)を書かせてみると、簡単な文法上の誤りがありに多く、初歩の文型や活用形の復習、クリニックの必要を痛感するのが常である。こうして J3 では、毎年、1~10 課の文型の復習、助詞のチェック、78 漢字のならしクイズなどから始め、その後 11 課に入ることになるのである。

以上、J3 の秋学期開始時の学力とその後の進捗の問題を見てきた。大いに文型を覚えさせ、口頭練習をさせたい時期—秋学期—に文字の学習に追われ、帰国前の春学期の半ばになってやっと初級文型が終わるといのはどう考えても矛盾がある。学生のニーズからみても学習の意欲からみても再考を要する点であろう。

II. 将来の国際部日本語教育のために

ここまで述べてきたことを踏まえ、国際部の初級日本語教育について、

3) 一般に、初級終了時の学習漢字は非漢字系で 300 字から 400 字、最高 500 字

独断ではあるがいくつかの提案をしてみたい。

1. 教材

まず、今最も大切なことは、国際部の学生たちの置かれた日本語の環境—言語生活—を理解し、それにたいする有効な対策をたてることである。ここで有効な対策とはまず教材による手当である。

国際部の学生たちは、家庭や部活などでのくだけた会話が早い時期に耳に入り、きちんとした日本語が身につけにくいこと、日本語で講義を聞いたり議論したりする機会がないこと、また、社会人のように改まった場面に身を置く機会がほとんどないためこれらの場面に必要なきちんとした日本語の学習にたいする動機づけが弱いことなどの特徴をもつ。日本語との付き合いが帰国とともに終わる学生も少しはいるが、将来母国や日本で学習を続けようとするもの、また、社会人となりビジネスマンとなってからも日本や日本人、日本の企業と接触する機会のあるものもけっして少なくないことを考えると、上記の言語生活上の弱点はぜひ積極的に補っていかねばならないところである。

このことから国際部の学生に適した教材の作成、あるいは選択を考えるとき、次のような配慮が特に必要になると思う。

1) 話しことばと書きことばをはっきり分けた教材を使い、かなり早い時期から違いを意識させる。(適切な使い分けができるように話しことばの練習と書きことばの練習は意識的に分けて指導できるようにする。)

2) 話しことばを日常生活レベルときちんとした場面のレベルにはっきり分ける。日常の必要を満たす表現や語彙を積極的に取り入れた会話を入れる。(できるだけ早く家庭でも意思の疎通がはかれるようにする。)一方、きちんとした話し方が必要な状況を設定、将来社会人として日本語を使う場合にも役に立つ日本語学習の必要を理解させ、練習する。(カジュアルな会話を好み、とかくくだけた話し方に流れやすいアメリカ人大学生には必要な対策の一つである。)

3) できるだけ早い時期から読み物を入れ、読解力の基礎をつけさせ

る。(できれば、いろいろなタイプの文章に触れさせ、作文の書き方の指導にも役立つ。))

4) 漢字を計画的に導入し、効率的に楽しく学べるようにする。(余分の負担なく学習できるよう漢字を選定し、学習漢字の数はレベル毎に段階的に設定する。)

5) 文法、語彙の予習は自習が十分にできるようにくわしい説明や語釈を書いたものを与える。(母語による十分な予習は教室での母語の使用を抑え、「日本語による日本語授業」の徹底が可能になる。)

6) 文型・文法ドリルのほかに、用法ドリルを大いに採り入れる。

2. 授業時間とカリキュラム

早稲田大学のような総合大学の場合、語学クラスは永久に50分授業になりえないのであろうか。また、90分の語学クラスが長すぎるとして問題になるのは、国際部のようなアメリカ人学生を対象にした場合だけなのか。初級だけの問題なのか。つねづね他学部、他語学科などからのご意見をうかがいたいと思っているが、ここでは、国際部初級日本語教育に限って考えてみたい。

50分授業の利点は、単に学生の緊張がほどよく持続する限界時間であるからというだけでなく、1コマが短くなることで、授業計画がきちんとたてられることである。話しことばの時間、聴解の時間、作文の時間、漢字の時間などのように、50分という単位によって各コマが技能別、目的別に使われるようになる。それぞれのコマの姿が教師にも学生にもよく見えるようになり、学生には到達感があり、教師には授業計画(実践—反省—修正—再実践)が行いやすくなる。前年のこの結果を翌年他の教師が試みることも可能になる。こうして、教師の間で、あるいは個々の教師によって特定の技能を高めるための研究と工夫がより活発に行われるようになる。

90分の場合はどうか。組んで教える教師との間で、教育内容にかんする責任分担があいまいになり、担当する教師の組み合わせによって、あるいは個人の好みによって年ごとにコースの教育内容が揺れてしまう欠点

ある。さらに重大な欠点は、個々の教師による工夫の成果が次の教師へと引き継がれることがなく、年々の積み重ねがえられにくいことである。これはそのコースだけでなくプログラム全体にとっても大きな損失ではないかと思われる。

もし、90分授業の枠が動かせないとしたら、次のような代案はどうだろうか。

90分を2つに分け、間に10分の休みを入れる。例えば、45分と35分、40分と40分、あるいは50分と30分に分ける。このほかに、週に30分とか1時間のLLの時間を課す。10分の休みを取ることで実質的に減った分を加算した30分~40分の時間を週に1,2コマ作り、その時間は同じ学習上の問題を持つグループ、あるいは同じ学習上の興味を持つグループなどに分け演習に当てる、などである。

3. レベルとクラスの数

現在、国際部の日本語クラスは、その年度の学生の傾向や多様性にかかわらずに6レベルに分かれているが、近年J3, J4, J5のクラスに学生が集中する傾向が見られる。これは、1つは学習歴ゼロの学生が減少しJ1の学生が少なくなっていることによる。また、J6に入る学生たちの学習歴と生育歴の多様さがJ6をやや特殊な中級クラスにし、その結果、初級を終了してきた学生がJ5に足留めされることから起こる現象である。よりよいクラス分けが行われるために、あと1ないし2レベル増やすことを提言したい。

終わりに

国際部は現在、創設26年目にあたる。筆者が国際部で教え始めてからもすでに20年になる。初めて担当したクラスは今でいうJ1で全員日本語学習歴ゼロであったが、当時を振り返ると学生たちの関心の中心は日本文化・日本文学にあったように思う。最近10年ほど経済・ビジネス専攻の学生が増えており、学生の関心の対象も社会科学や実学の分野に変わっ

てきている。こうした動向とかれらのニーズを国際部の日本語教育がどう受け止めていくのかも今後の課題であろう。しかし、いずれにしても、国際部の学生は国籍、母語、年齢などで同質の集団であり、かなりはっきりその姿をとらえることができる。このため、学生の多様化に悩む多くの日本語教育機関に比べればはるかに対策がたてやすいのではないだろうか。

最後に、紙数の都合もあり本稿では触れなかった課題がいくつかあることをお断わりしておく。例えば、教授法、プレースメント、適当なり授業時間数の問題などであるが、これらは別の機会に改めて取り上げていきたいと思う。

参 考 資 料

- 北條淳子「早稲田大学の初級カリキュラムとその教授法—国際部」、『日本語教育』46号、日本語教育学会、1982年3月
- 上山民栄「アメリカに於ける日本語教育—教授法と評価の諸問題」、『早稲田フォーラム』No. 54、1987年
- 川本 喬「学内における日本語教育の問題点」、『早稲田フォーラム』No. 54、1987年
- 加藤俊一「アメリカにおける中級の日本語教育—ミドルベリーからの報告」、『日本語教育』37号、1979年
- 田辺洋二「アメリカ人学習者に見られる問題点」23号、1974年
- 「特集 国別の問題点(7) アメリカ・カナダにおける日本語教育」、『日本語教育』61号、1987年